

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより

第2号

2017(平成29)年2月26日

(代表 梅田正之 090-5042-7775)

踏み込みて始むべし — 綿栽培者の心得 —

「できぬ事ハあるべからずと力を入、踏^{いれ}込^{ふみこみ}て始むべし」。これは江戸時代後期の農書『綿圃要務(めんぼようむ)』という書物の一節です。『綿圃要務』の刊行は天保4年(1833)。著者は現在の大分県にあたる日田出身の大蔵永常。諸国をめぐり歩いて綿作法を学び、その成果をまとめた綿の専門書です。綿作りの魅力を踏まえて、綿作を広く奨励することを目的に出版されたもので、とにかく「自分にもできないはずはないと思って努力し、思い切って始めてみるべきである」と述べています。

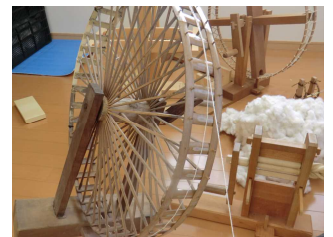
取り組み始める前からあきらめてしまったり、結果が出ないからとすぐに投げ出してしまいうようなことだけは絶対にしてはいけない、ということを強調している点は、前回に紹介した本居宣長の「うひ山ぶみ」の一節に通じるところがあって興味深く感じられます。

『綿圃要務』は「乾之巻」と「坤之巻」の2巻からなり、植物学的考察(図解)、品種解説をはじめ、栽培方法等が詳しく記されています。特に「坤之巻」では、播州、備中、備後、和泉、大和、河内の各地域ごとの栽培技術や収穫高の差などが具体的に記されており、綿作に取り組む上での画期的な指南書となっています。ただ、再版はされていません。理由は、この本が出版された江戸時代後期から末期にいたる頃には、すでに大和をはじめ畿内の綿作は減少傾向に転じており、その後、明治になって外国産の安価で良質の綿花が大量に輸入されるようになって、国産の綿花の需要が急速に衰えていったことが背景にあるようです。

とはいえ、その内容は現代においても十分に通用し、綿づくりに関心を持つ人であれば一度は目を通すにちがいないと思われる価値ある書物です。

以下に、乾之巻から「綿を作る人、心得の事」(綿栽培者の心得)から一節を引用し、現代語訳をウラ面に掲載します。なお、原文は『日本農書全集』第15巻(1977年 社団法人農山村文化協会発行)に拠っています。

まづわた はじめ 先 綿を 始 て作らんと思ふ人は、ただ 只一年二年作りて利潤なきものとして捨^{すつ}べからず。何事^{よそ}にても余所にて作るものなれば、同じやうにできぬ事ハあるべからずと力を入、踏^{いれ}込^{ふみこみ}て始むべし。此綿も車にて糸につむぐを見て察すべし。まづ 先車を右の手にて廻し、左りの手にてつむぐにも、紡車にわらしべをさし、それ^{それ}へ篠^{しの}巻^{まき}の先を少し糸によりてまき付、引^{ひき}出して、それより段々引出してハ巻付／＼する事、ならひ 始^{はじめ}ハ 定^{さだめ}てうひ／＼しく、辛気なる事なるべけれども、馴^{なれ}て八十歳前後の小女も平気にてつむぐやうになるなり。是をよく察して、綿も土地を論ぜず作りたまふべし。第一家ごとになくなくてはならぬ入^{いり}用^{りよう}のものを、手づくりにして沢山着用するのミならず、代料を他へとられず、なれてハ作るに 楽^{たのし}ミありて、多くとり得れば、用ひたる余りを売^{うり}て、他より代料をとるやうになりて、甚^{はなはだ}面白^{おもしろ}きものなり。(『日本農書全集』第15巻 341-342頁より)



Monthly Data

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成29年1月26日～平成29年2月25日)

茨城県1、群馬県1、千葉県1、神奈川県2、岐阜県1、静岡県1、滋賀県1、京都府1、大阪府1、奈良県1、熊本県1

【H.A.M.A.木綿庵】(平成29年1月26日～平成29年2月25日)

メールを含む各種相談件数2、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数2件2名



『綿圃要務』「綿栽培者の心得」の一節 — 現代語訳 —

綿を初めて栽培してみようとする人は、わずか一、二年で利潤がないからといってやめてしまわないことだ。何事も、よそでつくっているものなのであるから、それと同じようにつくれないはずはないと努力し、思いきって始めるべきである。綿をつくるには習練が必要であることを、紡車（編注：糸車）で糸をつむぐようすを見て察するべきだろう。まず車を右の手で廻し、左の手で紡ぐのだが、そのとき紡車にわらしべを挿し、それに「篠巻（編注：じんき）」の先を少し糸によって巻き付けて引き出す。それから少しずつ引き出しては巻き付けすること。習い始めは手馴れず思うに任せずいらだたく辛気くさいことだが、馴れてくると十歳前後の少女でも平気で紡ぐようになる。この例をよく考えて、綿作はどんな土地にでも行なうべきである。なにより生活必需品を手づくりにして着用するだけでなく、その代価を取られることもなく、しかも、慣れればつくるのが楽しみとなり、また多く製作したならば、余りを売って代価をとるようになり、なかなか面白いものである。（『日本農書全集』第15巻 341-342頁より）

《綿の歴史》 — その1 綿の起源 — 木綿庵1号畑に掲出のオリジナルパネルより

綿の栽培と利用は古くから行われていたらしく、その起源は5,000年以上も前に遡ると言われています。原産地はおもにインドと、中央アメリカおよび南アメリカで、染色体の数がそれぞれ13個と26個と異なるため、同じ畑で育てても交配はしません。

インド（旧大陸）発祥の綿はおもにアジアに広まったためにアジア綿とも呼ばれ、のちに日本に伝えられたのもこの種の綿です。

アメリカ大陸（新大陸）発祥の綿はその後に品種改良が行われ、19世紀には世界各国に広がり、現在では世界の綿花生産の約90%がアメリカ綿系のアップランド綿であると言われています。

※木綿庵では、アジア綿系の綿を和綿、アメリカ綿系の綿を洋綿と呼んでいます。

【綿の加工の作業記録】（梅田1人の作業量）

・糸車を用いての糸紡ぎ量（和綿）

1月26日～2月22日（作業実日数22日） 糸の総量143.1g（38.16匁） 総時間505分（8時間25分）

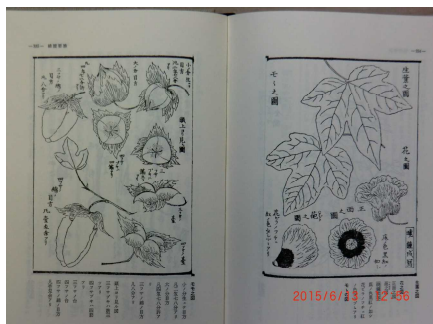
※1分間≒0.283g 1時間≒17g（4.5匁）

【機織りへの歩み】 唐弓の弦について

綿打ちに用いる綿弓には、竹弓と唐弓があります。その弓に張る弦には、弾く力（強度）と、表面の滑らかさが求められます。「最適な素材は鯨筋、2番目がシープ」と教えていただきました（名古屋の丹羽正行氏より）が、いずれも現在は入手困難とのこと。

【研修等の記録】

- ・平成29年2月8日「河内木綿はたおり工房」（東大阪市東石切町）を訪問、見学。
- ・平成29年2月15日「東大阪市立郷土博物館」（東大阪市上四条町）の地機（じばた）を見学。
- ・平成29年2月23日「八尾市立歴史民俗資料館」（八尾市千塚）を訪問。唐弓の弦の張り方を教わる。



『綿圃要務』の綿の図解



唐弓に弦を張った様子



唐弓の弦の締め付け部分